

# 河川における水稲用殺虫剤フェノブカルブ（BPMC）の濃度推移

～農薬使用後は必ず止め水にして流出させない～

河川水中のフェノブカルブの濃度推移を調査しました。7月上旬から9月中旬頃まで検出され、水産基準値を超過することはありませんでしたが、水稲の中干し前後に比較的高い濃度が計測されました。水田では農薬使用後は必ず止め水にし、水路や河川に農薬を流出させない水管理に努めましょう。

## 1. 背景と目的

水田は水路で河川につながっているため、使用された農薬の一部が河川へ流出することがあります。また、地域で同じ農薬の使用が集中すると、環境への流出量が多くなります。昨年、農薬取締法が改正され、すべての農薬において流出を防止するよう努めることと記載されています。そこで、今回は殺虫剤フェノブカルブ（BPMC、商品名バッサ）について、河川中の濃度推移を調査しました。

## 2. 研究成果の概要

2017、2018年の5～10月にかけて、河川水中の農薬濃度を週1～2回、3地点（地点A、B、C）で調査しました。

今回調査したフェノブカルブはウンカ類に効果のある殺虫剤で、7月中下旬水稲の中干し前後にウンカ類、コブノメイガ、いもち病の防除に使用されているパダンバッサ粒剤やパダンバッサオリゼメート粒剤などの一成分です。

調査結果（図1、2）では水産基準値（水産動植物に影響を与えないように農薬成分ごとに決められた上限値）を超過することはありませんでしたが、7月上旬から9月中旬にかけてフェノブカルブが検出されました。特に2017年7月下旬には水産基準値に近い濃度まで高くなりました。2018年はそれに比べて低い濃度で推移しました。2018年は中干し時期に降雨が少なかったため、環境への流出が減少し、濃度が低くなったと考えられます。

## 3. 環境負荷低減に向けた対応

環境負荷を低減させ、農薬の効果を十分に発

揮させるには、農薬使用後は水をかけ流しせず、止め水管理をする必要があります。特に水田除草剤や粒剤を使用した場合は7日以上止め水管理が有効です。天候に左右されることはありますが、河川中の農薬濃度を下げするためには、生産者一人一人が適正な水管理や、流出防止に努める必要があります。

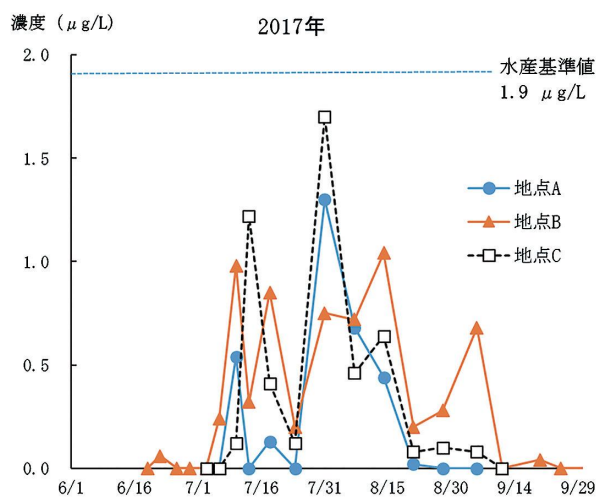


図1 2017年フェノブカルブ濃度推移

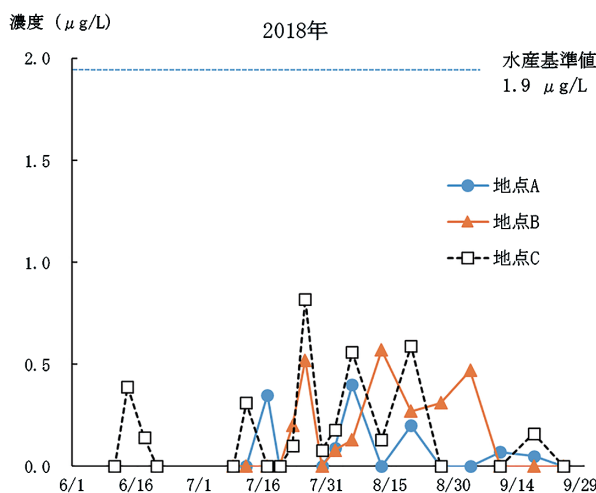


図2 2018年フェノブカルブ濃度推移

(環境科 西川 学)